Original Human Nature and Challenges in Life

人間の本性と人生の挑戦

野田啓介
哲学教授
統一神学校ベリータウン大学、New York, USA

序論

人生は挑戦に満ちています。生誕から死まで、人はあらゆる挑戦に遭遇します。人は挑戦の中に生まれ、挑戦を受け、最後の関門である死の挑戦を受けるのが人生の常です。こうした挑戦に対するべく、肯定思考（positive thinking）の書籍はプラクティカルな対処の仕方を喧伝しています。曰く「何か起ころうとも、肯定的に受け止めなさい。あなたの人生は、自分の思考がもたらしたものです。すべて挑戦は成功のチャンスです。」社会的な成功や繁栄にむけて、肯定思考は、大衆を魅了しています。

肯定思考は逆説的です。挑戦が軽い時は必要ないし、過大なものの場合は、物足りないと感じます。アウシュビッツの囚人のような、過酷な状況下にある人に、果たして通用するでしょうか？

かかる過酷な状況下では、「神さえも裁判にかける」ということも起こりえます。Elie Wiesel（エリー・ウイーゼル）は、自分の経験を下に「神の裁判」（The Trial of God）
という戯曲を書きました。15 歳の時でした。アウシュビッツのバラックの裏に呼び出されるとそこには 3 人のラビがいて、自分たちで、神が有罪かどうかを審議する模擬裁判を開いていました。ユダヤ人に祝福を約束した神が、その約束を違えた。果たして神は有罪は否かとという審判でした。判決は「有罪」でした。しかし、そこにいた全員は、黙したまま静かにともに祈りを捧げました。問題は、神学的には神義論というものです。「もし神が全能で、善、そして愛であるならば、どうして地上に悪を放置しているのか」という問いです。同様に、人間が過酷な問題に遭遇したとき、「なぜこんなことが自分に降りかかるのか？」と問うことでしょう。

さらに「なぜ自分は、自分が望んでもいないのにこの邪悪な世界に生を受けたのか？そして生きてゆかなかればならないのか？」と問わざるを得ません。父母に「なぜ私を生んだのか？」と問えば、「なぜお前が私のところに生まれたのか？」と答えが返ってくるでしょう。思いもよらなかった人生の挑戦を受けるたびに、人は人生の意味、挑戦の理由を問わざるを得ません。

本論文で、人生における挑戦の意味に哲学的分析をしたいと思います。

第一に、自分に降りかかる運命ともいうべき「挑戦」を分析をします。
第二に、挑戦の持つ意味と、それに応戦する自分の応戦の仕方が、人生の意味にどのように関わっているかを問います。
第三に、統一思想の本性論の愛（心情）、真理（理法）、創造性が、何を応戦のあり方の分析に寄与しているかを解明します。いかに愛が人生を豊かにし、真理が、人生を真実のものにし、創造性が人生を喜びのあるもにするかを明らかにします。
最後に、人生の意味は、挑戦を乗り越えた後に各自に示され、その意味が次第に蓄積され、相互に連動しながら、解釈学的な部分と全体の関連のなかで豊かになっていくか、そのプロセスを論じます。

そして、挑戦と応戦の過程で、どのように個人が、ふたつとない固有の存在（個性真理体）となるかを明らかにします。
この分析の背景として、世界は「不確定性」の要素をもち、直線的な因果関係ではない説明のモデルを用います。フロー理論に関連して、人生と世界を「遊び」の観点から見るという視点もその背景にあります。人生というつかみどころがなく、逆説に満ちた存在を、統一思想の観点から明らかにしようというのが本論のねらいです。

人生は逆説的です。人は挑戦を避けようとしますが、挑戦を避けては、自分の中にある最善のものを発見することはできません。挑戦は、適切な程度であれば、人生を刺激的で、面白いものにします。人生は倦怠と無関心のあいだにあります。挑戦がなければ人生は退屈で飽き飽きしたものとなります。ことに青年が無謀な冒険を試みるのは、人生には挑戦的な刺激が必要だからです。人生は創造的で刺激的であるためには挑戦を必要としています。しかし挑戦があまりに過酷であるときは、人は、自己防衛から、無関心（アパシー）となります。あまりに過酷な挑戦が立ちはだかると、人は自殺すら考えます。人は希望がなければ死ぬこともできず、死が希望と錯覚するほどに現実が苛酷な時、人は自分の命を絶つことすらします。

挑戦と応戦の逆説的テンションは、人生のメカニズムのようです。炭素がダイヤモンドに変わるには、高圧と高温が必要なように、人のなかにある最善のものは、困難を通してのみ発見されるのかもしれません。しかし、たいていの人にとっては、人生における挑戦は、過酷な現実であり、無意味で、不条理、そして残酷な現実です。限界的な挑戦に対処する道はあるのでしょうか？アウシュビッツを生き抜いた精神医学者、ヴィクター・フランクルの発見から、話を始めたいと思います。

１．限界状況における思索

１９４４年、10 月、39 歳の時、フランクルは妻とともにアウシュビッツに収監されました。どんなことをしても構わない、どんなこともありえる状況の中で、人はどんな行動をとり、何を考えるのでしょうか？

強制収容所という暗黒のどん底の中で、己の生存のためには何事もありうる状況下で、様々な人間模様を目撃しました。看守の補佐として同じユダヤ人の囚人から選ばれた者たちは、ナチの看守よりも残忍でした。その一方で、一片のパンのかけらを与える人もあり、その親切を愛を忘れることはできないと、フランクルは追想し、「人間が目指しうる最高のゴールが愛であるという究極の真理をはじめて理解した」と述べています。

囚人が思うことといえば、家族と楽しく談話したひと時であり、その安全を気づかうことでした。このように愛の思いこそが、すべてを剥奪された絶望的状況の中で、人が想いを寄せるものでありました。

２．人生における挑戦

遺伝的なもの

人は特定の遺伝内容を受けて生まれます。肌の色、顔つき、体つき、身体の形質、才能まで、あらゆるものを遺伝的に決められて生まれます。生まれ落ちた家庭環境、社会環境も与えられて生まれます。受けたものが良い場合にはそれほど問題にはなりませんが、それが困難なものだったとき、人は、そうした挑戦を考えざるを得ません。

マタイ効果：有利不利の蓄積的効果

人生における有利、不利の条件は、社会の中で波及効果を持っています。社会学者、ロバート・マートンは、科学界におけるそのメカニズムを明らかにし、聖書のマタイ伝にならってマタイ効果と名づけました。マタイ伝２５：２９には「持っているものはさらに富、持たざるものは、持っているものも取られてしまう」と記されています。
有名な科学者と無名の科学者が共同執筆した場合、たとえその研究はほとんど無名の科学者の手になるものだとしても、著名な科学者の成果として、学会では扱われます。またそうした科学者がほぼ同時に発見をした場合、著名な科学者が発見者として認められます。

マートンの研究に続いて、教育、経済、文化等あらゆる分野で研究されましたが、同様の傾向がありました。ダニエル・リグニーは、それらの成果をまとめて、「マタイ効果：いかにアドバンテージがアドバンテージを生むか」という本にまとめました。通俗てきに言われる「富む者はさらに富み、貧しい者は、さらに貧しくなる」ということを社会学的に実証したものです。

マタイ効果の意味するもの

人が生まれ持ったものや、生まれた環境は、その場にとどまらないで、優遇された人のもつ良い条件はさらに有利な状況をもたらし、不遇な条件はさらに不遇な条件を得がちであるという、不公平な社会的状況があります。優遇、不遇という生の条件は、社会的に尾を引いてゆきがちであるという点は重要です。

否定的な力（悪）の挑戦

「善悪の分岐点」(Tipping Point of Good and Evil)という私の論文で明らかにしたように、人間を悪に誘惑する力が、心の中にも、また外からもあります。プラトンは、「ギゲスの魔法の指輪」の物語を「国家」で取り上げています。昔、あるところに羊飼いがいました。嵐のあとぽっかり空いた洞窟で、死んだ先王の指に指輪があるのを発見します。その指輪を指につけ、右に回すと自分の姿が見えなくなり、左に回すと元通りになりました。透明人間になれる魔法の指輪を得たギゲスは、宮殿に行って、女王と共謀し、王を殺して国を奪います。この物語は、ロード・オブ・リングズにも使われています。

人間は、力を得て、しかも自分の行為が道徳的にも、法的にも誰からも罰せられなかったとき、それでも善にとどまれるかという問題です。チェックアンドバランスのメカニズムもなく、力を得た場合、人は、簡単に不正を行い、腐敗します。

さらに怨みや憎しみ、偏見など、否定的な感情も、チャレンジとして、人の心に存在します。本論文では、倫理の問題はとりあげませんが、こうした問題があることを述べておきます。

３．どうして人生は挑戦するのか？

人はチャレンジに遭遇した場合、説明を求めます。古代より、魔術師、占星術師、占い師などは、原因結果の単純な説明を与えて、「不幸の原因」を説明してきました。問題は、すべての事象が因果律で拘束されているのかという点です。

私は、世界には誰も予期できず、決定できない「不確定性」の要素があると考えます。

世界の不確定性と心のメカニズム（予期、期待、信仰、希望）

世界には不確定性の要素があり、それに対応して、心には、予期、期待、信仰、希望などのメカニズムがあり、両者は対応しています。もし世界に不確定性がなく、すべてがコントロールできるのなら、こうした心のメカニズムは無意味です。

倦怠とアパシー（無関心）

人生は、倦怠と無関心無感動のあいだにあります。挑戦がなければ人は、飽き飽きし、耐え難いほど大きすぎれば、無関心・無感動となります。挑戦と人の対応能力に適切なバランスがあるときには、人は挑戦を通して、自分の能力が磨かれ、成長してゆきます。

なぜ人生には挑戦があるのか？

この問は三つの問いに書き換えることができます。第一に、挑戦は、人生の根本的なあり方とどう関わっているのか？第二に、挑戦は、人生においてどういう意味をもっているのか？第三に、どうして特定のチャレンジが、自分に降りかかるのか？これは実存的な問いです。

人生は挑戦と応戦である

人生は挑戦と応戦であると考えると、三つの問が生まれます。第一に、なぜ人生は負える程度のチャレンジを与えず、追いきれないようなチャレンジを与えるのか？第二に、チャレンジの程度と人間の対応能力にバランスは確保されるのか？第三に、人が生まれつき背負わされる人生のチャレンジは公平であるのか？（この問いは神学的な課題をはらんでいますが)。

私は、「人生はゲームである」という形で答えたいと思います。ゲームには三つの特徴があります。第一に、そこにはルールと不確定な要素の両方があります。第二に、ゲームは一回一回がチャレンジであり、そのチャレンジを通して、プレイヤーは自分の力を上達させてゆきます。第三に、ゲームは、結果もさることながら、プレーすることそのものに刺激と喜びがあります。自我を忘れ、完全に没頭する姿は、心身統一の姿です。
人生をゲームにたとえることは、人生が「遊び」であり、競争的なものであることも意味しています。

４．解釈学的問い：挑戦の意味　―創造性、真理、愛

解釈学は、古くは宗教の経典や法の解釈の学として始まり、長い伝統を持っています。挑戦と応戦の意味も、解釈学的原則にそって解明されます。解釈学のもっとも基本的な原理は、部分と全体の原理です。そこには部分と全体のあいだに循環性が有り、部分の意味は、解釈の枠組みによって変わり、部分の理解がまた解釈の枠組みを再構成します。つまり、解釈は部分と全体、個別の理解と解釈の枠組みの循環の中で進んでゆきます。

人間の「理解の構造」は基本的に循環的です。「独善的な前提を想定し、それを当てはめてゆく」という直線的な思考、パターン化した思惟のあり方は、分類、計算には適していますが、意味の解釈には不適当です。

人生の意味は、それぞれのチャレンジを乗り越え、その意味を理解し、意味が蓄積されながら形成されてゆきます。

クリエイティブであれ：創造性と頂上経験

創造性は、人生というゲームをプレイする鍵となる能力です。チクセンミハイリは、我を忘れて没頭する経験を「フロー」と呼びました。富、暇があること、自由があることで、人は必ずしも人生が喜びに満ちたものになるわけではありません。人は、挑戦がだんだん大きくなり、それに対応して自分の実力が向上してゆく時に、喜びを感じます。

では、チャレンジがあまりに大きく圧倒するほどのものであったとき、それをどう捉えたらいいのでしょうか？

私は、人生はそれでもゲームだと考えます。問題は、人が、自分と現実のあいだにある緩衝地帯を喪失したときです。実際には、なくなるわけではないのですが、なくなったと錯覚するわけです。「現実」と自分のあいだには流動的な緩衝地帯、バッファがあり、自分次第でいろいろな態度をとることができます。一歩下がってみたり、小刻みな段階にすり替えてみたり、違う方向に転換したり、助力を仰いだり、いろいろ考えることができます。創造力は、この緩衝地帯の中で働くので、現実と自己のあいだに車のハンドルの「遊び」のようなフレキシブルなものがあることを知る必要があります。

たとえ小さな挑戦でも、この緩衝地帯が見えなくなると、現実が硬直し、絶望に陥り、自殺することすらあります。

過酷な現実は、危険なゲームでもあります。しかし、人生をゲームと見ることによって、生死をかけた危険なゲームに遭遇したときでも、余裕を確保しやすするなると思います。

逆説的で、アイロニカルですが、人間は最も困難な状況の中でこそ、自分の中にある最善のものが現れ、それを発見します。困難に遭遇しなければ見いだせなかったような最善の資質は、そうした挑戦が訪れなければ、可能性として残されたままです。

挑戦を超えてゆくこと、問題への解決を見出してゆく過程は、同時に自分を発見するプロセスでもあります。

真実であれ：本来的な固有の自分になること

人は、誰も他の人の人生を生きることはできません。人生は、絶対にその人のものです。ハイデッガーは、「存在と時間」の中で、「死に向かう存在」と人間のあり方を規定し、死によって、人は自分が固有の、他の人に変えられない存在であることを自覚すると述べています。人は、どんなに他の人がいても、死ぬときは、自分ひとりで死ぬしかなく、常に「自分の死」を死にます。

自分を他者と区別するのは、自分のアイデンティティです。誕生から死まで、人生は固有の自己のものとして個別化しています。

チャレンジの意味もまた個別化しています。あることがなぜ、どのように挑戦となるかは、個人によって違う面があります。例えば、どこにでもある若き日の恋愛が、キルケゴールにとっては重大な問題と受け止められ、婚約後、彼は一年間悩んだ末、破棄し、この恋愛問題が、彼の思想の源泉のひとつとなって、生涯にわたって彼はそれを再考します。これは、チャレンジの意味は、その人固有の面があるという一例です。

挑戦への応戦は、自分のなかにある特有のポテンシャルを発見するプロセスでもあります。問題解決の鍵となる洞察、インスピレーション、アイデアなど、その人独特のものがあります。

固有性は、しかし、可能性として秘められており、挑戦に対応することによって、初めて開花、発見されます。
統一思想では、「個性真理体」という概念で、人間が固有の真理の体現体となると捉えています。そのようになるためには、人は「より真実に生きる」努力が必要です。

挑戦の意味は、超えた後から発見する

「なぜこんな問題が自分に降りかかったのか、どうして自分はこんなふうに人生を始めなければならなかったのか？どうしてこのように自分は生まれたのか？」という問いに、答えはありません。誰も答えられません。またある年れいに達するまで、そうした問いも問いません。船にたとえれば、港を出て何年もしてから、はじめて自分はどこから来たのか、どこに向かっていくのか問うようになるようなものです。

それぞれのチャレンジの意味は、それを超えて初めてわかります。超えることによって、解釈の地平が広がり、その意味がさらに深まることもあります。「部分と全体」の解釈学的原則にもとずいて、意味は、深化していきます。挑戦を一つ越え、また一つ越えするたびに、その意味を発見し、新しい意味の発見が、自分の解釈の枠組みを広げ、意味は重層的に、ダイナミックに重なり、その全体が、「自分の人生の意味」を与えます。

愛をもつこと：愛をもち、人生を共有することにより人生は豊かになる

各自は、自律的で、誰も干渉できない、神も干渉できない自由の領域を持っています。自律とは、自分で自己を律することで、法は自分自身の中にあり、法が自分以外のところにあって、外から律される物の他律と区別されます。カントは、道徳的な意味で自立を論じましたが、ここではもう少し広い意味で使っています。

人は固有の自己であり、自律的でありますが、「自分の人生」は自分の人生だけで成り立っているわけではありません。人生は、自分次第、自分が思うままの結果だと言う人がいますが、これは一面の真理に過ぎません。

第一に、個人の自由は、社会的、歴史的状況によって制限された自由です。戦争、紛争、財政破綻、命に関わる病気、突然の家族の死、自然災害など、社会的自然的歴史的状況が、選択しうる自由を制限します。

第二に、自分の人生をよく見れば、そこには他の人の人生が重なり合い、自分もまた他の人の人生の一部になっています。比喩的にいえば、身体は物理的な家に住んでいますが、「自分」は、自分を愛する者の心の中に住んでいます。人の人生は互いに重なり合い、互いに分かち合いながら存在しています。

愛は人生の鍵であり、人生を分ちあうことを可能にします。他の人の人生が、自分を前から後ろから、上から下から支え、助けてくれることによって、人は、生きています。人は、父母の愛を因縁とし、父母や養育してくれた人の愛によって生存が可能になったという事実にあります。フランクルが経験したように、人は、限界状況に遭遇すると、そうした自分のルーツを思い起こすのかもしれません。

愛は他者へ自分を開くことであり、同時に自分がとらわれている憎しみや恨みなど、自分自身を開放するものでもあります。分かち合う関係の中で、自分の喜びが他者の喜びとなり、また他者の喜びが自分の喜びとなります。愛の関係の中で、悲しみ苦しみもまた共有することになりますが、重荷を分かち合うこともまた、人生を豊かにするものです。

結論

私は、この論文で、人生を「挑戦と応戦」、ゲームとして捉えてみました。いかなる状況下でも、人がなしうることとは何でしょうか？それは、創造的であること、愛をもって生きること、真摯に生きることこの三つに尽きると思います。人は、創造的に生きることによって人生を刺激的で、面白く、喜びがあるものに変え、真摯に生きることによって、本当のユニークな自分を見出し、愛をもって生きることによって、人生は豊かになるのだと思います。人生の意味とは、発見と、共有、喜びに満ちた力動的な生を実現することによって、生み出されてゆくものだと思います。それはどこかに固定的に存在するものを探して見つけるというたぐいのものではなく、「生み出されてゆくこと」に自ら接し、それにより発見されてゆくものだと思います。